





第6章

東洋のガラパゴス

奄美大島

桑原季雄

(鹿児島大学法文学部)



サトイモ畑の農家 ©青山 良氏提供

九州南部から台湾に至る島々を琉球弧という。奄美群島はそのうち北緯 29 度から 27 度にわたって連なる有人 8 島を指す。奄美大島とその周辺 3 島（加計呂麻島、請島、与路島）、喜界島、徳之島、沖永良部島及び与論島である。奄美大島と周辺 3 島を合わせた面積は 818km²、奄美群島全体の人口は約 13 万人で、一市十町村からなる。また、奄美大島本島の面積は 719.5km²、人口約 7.4 万人で、日本の離島の中で沖縄、佐渡島に次いで 3 番目に大きい島であ

る。湯湾岳（694m）を主峰として、高さ 400m 以上の山々が南北にのびており、海岸近くまで山地が迫る沈降型地形で、海岸は良港に富む。集落は島内各地のリアス式湾頭の小さな平野部に点在しているため、かつては孤立的の性格をもち、言語や民俗の違いも少なくない。

この南西諸島はおよそ 1000 万年前、アジア大陸と陸続きであった。この時代に、多くの動物たちが大陸から渡ってきた。約 150 万年前になると、現在のトカラ列島あた

りで陸は途絶え、生物の移動もストップした。そして約100万年前には活発な地殻変動により、南西諸島はいくつかの大きなブロックに分かれ、沈降と隆起を繰り返した。この変動によって陸続きであった低い部分は海になり、高い部分は島になった。屋久島、奄美大島、徳之島、沖縄、石垣島および西表島が後者にあたる。また、海に沈んだ低い部分はサンゴ礁の発達により、再び隆起サンゴ礁の島になった。喜界島、沖永良部島、与論島がこれにあたる。

このように、奄美大島は大陸と陸続きの状態が長く続いて多くの生物の渡来があったが、分離した後海に沈まなかったため、古代から生き続けている動植物が多く、その海に閉ざされた環境の中で独自の進化を遂げた。それが、この奄美の島で生きた化石と呼ばれる

固有の動物たちだ。この中には、国の特別天然記念物のアマミノクロウサギと、同じく国の特別天然記念物で県鳥でもあるルリカケスがいます。ルリカケスは広い地球上で唯一奄美だけに生息している鳥で、アマミノクロウサギやイボイモリなどと同様、大陸時代の遺存種であり、奄美独自の生態系へ進化適応してきた特産種である。そのほか、アカヒゲ、オーストンオオアカゲラ、ケナガネズミや絶滅寸前のリュウキュウアユなどほとんど奄美でしか見られない野鳥や南西諸島の固有種が多い。また、奄美には日本で第2位の面積を有するマングローブ原生林もある。このように、奄美大島は日本でも珍しい動植物の宝庫であり、しばしば「東洋のガラパゴス」とも称されるゆえんである。

奄美生物最後の 聖域、 きんさくぼる 金作原原生林

奄美ではこれまで文献の記録種を含め、約300種近くの野鳥が記録されているという。現在日本で記録されている野鳥種約560種の半分以上が、この奄美で記録されてきたことになる。これには、渡りの途中で奄美に立ち寄る野

鳥や迷い込んでくる多くの野鳥種も含まれる。それだけに、これらの野鳥たちにとっても、奄美の自然環境や独自の生態系は重要な意味を持っているのである。

ルリカケスは10月～11月頃になると、好物のドングリを地中などに埋めたりして貯食し、冬に備える。これらの種子散布が新たな森づくりや森の再生に役立っている。つまり、イタジイやアマミアラカシなどの広葉樹林の生育にルリカケスが一枚絡んでいるのだ。固有亜種のオオトラツグミやオーストンオオアカゲラは特に原生林に依存して生きている野鳥である。オオトラツグミは推定繁殖個体数が100羽前後で、最も絶滅が心配されている野鳥だ。オーストンオオアカゲラも老木や大径木などのある原生

林なしには生息していくことが難しいとされる。

かつては、奄美の森はどこも、ルリカケスをはじめとする多くの野鳥その他の固有種にとって、安全な住みかを提供する一種の聖域であった。しかし、戦後になって、そうした森の多くは開発によって次々に失われ、唯一手つかずの森として残っているのが金作原原生林^{きんさくばる}である。ここは奄美の中でも、天然林が半分近く残っており、イタジイなどは樹齢100年を越すと言われる。かつてWWFの視察に来鳥した英国のエジンバラ公も「スペクタクル」の連発だったという。また、ゴジラ映画のスタッフはこの金作原原生林のポスターを見て、奄美ロケを決定したともいわれている。奄美の森の多くは、戦後、俗に「奄

振」と呼ばれる開発の波に吞まれて、木が切り倒され、林道が縦横に走り、トンネルが掘られ、山肌が削られ、人の気配が彼らの森の奥深くまで忍び寄ってきたのだった。最



金作原原生林 ©名瀬市役所袖観光課

近、こうした奄美の生き物たちと人間のぶつかり合い象徴するかのよ
うな事件が起こった。これはゴルフ
場の建設をめぐる、開発か自然

保護かで島を二分し前代未聞の
訴訟にまで発展した、いわゆる「ア
マミノクロウサギ訴訟」である。

アマミノクロウサギ 訴訟

この訴訟は、わが国で初めてア
マミノクロウサギ等の野生動物を
原告として提起された訴訟として
全国に注目された。

この発端はこうである。奄美大
島の住用村のゴルフ場予定地を
含む市崎地区は古くからアマミノ
クロウサギが多く生息する地域の
ひとつとして知られていたが、
1992年、ゴルフ場開発によるア
マミノクロウサギの生息地への悪影
響を懸念した原告は、開発予定地
及びその周辺地域で観察活動を
行い、アマミノクロウサギの糞など
の生息痕を発見した。原告は、ア
マミノクロウサギをはじめとする奄
美の自然を代弁することを目指し
て、彼らに代わってゴルフ場開発
反対の訴訟を起こしたのだ。

この裁判の最大の争点は、自然

環境の保護を目的とするいわゆる
「権利能力なき社团」、あるいは自
然環境の保護に重大な関心を有
する個人（自然人）が自然そのも
のの代弁者として、現行法の枠組
み内において原告として適格と認
め得るかどうかにあった。裁判所
は1999年、「原告適格」に関する
これまでの立法や判例等の考え
方に従い、原告らに原告適格を認
めることはできないとの判断を下
した。生き物たちの一番敗訴であ
った。

戦後の奄美大島は一方で港湾、
道路、護岸工事などの土木工事
が急ピッチで進み、急速に自然が
失われていくが、他方では自然保
護運動や環境保護運動など、奄
美の貴重な森や海を破壊するよう
な大規模な開発計画に対しては
真っ向から反対する運動が沸き
起こった。1970年代初頭には、
宇検村の枝手久島うけんそん えだてくじまの大規模開発
問題で推進派と反対派が村や島
を二分して対立した。枝手久島の

海岸を埋め立てて大規模な石油備蓄基地を建設するという計画がもちあがり、内外の自然保護団体や環境保護団体とその賛同者たちが何年にもわたる激しい反対運動を展開した結果、計画は中止と

奄美の生物の 紹介者フェリエ 神父

奄美の生物をいち早くヨーロッパに紹介した外国人がいた。カトリック神父ジョゼフ・ベルナル・フェリエ師である。奄美大島におけるカトリック教の布教は1881年(明治14年)、フランスの外国布教団から長崎に派遣された宣教師フェリエ師が1891年(明治24年)12月末、奄美大島伝道の目的を持って名瀬に来島した時に始まった。当時名瀬の人口は6～7千人といわれ、フェリエ師は名瀬を根拠地として、主に大島の北部地方に伝道網を敷いて熱心に布教した。しかし、その後健康を害して1906年に療養のため故国フラン

なった。戦後の半世紀、国からの振興開発の大型予算に依存してしか財政が成り立たない奄美群島は、同時に、度々開発か自然保護かで最も激しく対立してきた所でもある。

スに帰国を余儀なくされた。彼が植え付けた信仰の種は後継者の努力によって大正の初期には相当の成果を見るに至った。1918年の調査によれば、奄美大島におけるカトリック教会の信徒数は3,799人、教会堂は9、宣教師はフランス人宣教師2名、日本人伝道師3名であった。

フェリエ師は宣教師としてばかりでなく奄美生物の研究者としても奄美大島を世界的に紹介した第一人者であった。フェリエ師は布教の傍ら、奄美大島特有の昆虫や植物等を採集して故国の学界に送っていたのだ。彼はもっぱら鞘翅類しやうしを集め、これをフランスの有名な甲虫蒐集家ルネ・オベルチュールへ送った。フェリエ師の採集品に基づく最初の論文は1894年(明治27年)に出ている。彼が送った甲虫類がフランスの学者の関心を惹き、オベルチュール



サトウキビ畑の農家 ©青山 良氏提供

から激励と相当の報酬を受け、これを伝道と教会建立の資金に充てた。フェリエ師の採集品はすべてオベルチュールの手から専門家の手に分配され、相次いで出版された若干の論文中に記述された。また、その一部は英国の学者の手にも渡り、フェリエ師の採集品として記録されたものもある。フェリエ師はまた植物、特に蘚苔類せんたいたいと羊歯類しだにも関心を持ち、これも昆虫と同様にその材料をフランスに送り、後に専門家により研究され、彼の名が冠せられた種類もいくつ

かあるという。

大正11年以来、奄美大島の伝道はフランスの外国布教団の手を離れてカナダのカトリック教派の管轄となり、日系カナダ人宣教師米川基が渡島して布教の傍ら名瀬に大島高等女学校などを経営して島民の教化に努力した。

初めて奄美の 自然を撮った男

戦前に、奄美の貴重な生き物たちを写真に撮り、世界にいち早く紹介した一人の日本人写真家がいる。1935年(昭和10年)年4月12日、奄美の住用村^{すみようそん}の城^{くすく}に日本初の自然写真家といわれる下村兼史がやってきた。城の山は密林で覆われ、シダが多く、そそりたつヘゴの木の彼方からアカヒゲのさえずりが流れ、オーストンオオアカゲラが木を叩いているのが聞こえ、そしてあちこちにアマミノクロウサ

ギの穴や通路があったという。

下村の奄美行き最大の目的は天然記念物のルリカケスを撮ることにあった。アマミノクロウサギとルリカケスを初めて写真におさめた下村は、1935年の秋、ロンドンの大英博物館で開催されたカントリー・ライフ社主催による世界自然写真展にルリカケスの写真を出品し、観客の目を集めた。ルリカケスの写真の隣には「ルリカケスの生息地」として住用村の森林の様相の写真が並んでいた。これこそまさに、ルリカケスと奄美大島の姿が国際的な自然写真展の舞台に登場した最初の作品であった。



トラクターに乗る農家 ©青山 良氏提供

毒蛇ハブとの共生

奄美大島の自然保護に別な形でこれまで一役買ってきたのが毒蛇ハブである。かつて島民は長い間ハブとの戦いに苦勞してきた。昔は年間300人も噛まれ、その半数は死亡したという。ハブに噛まれるとその部分を切ってしまうと毒が全身にまわる恐れがあったので、とっさに鎌などで患部を切断し、そのため不具になったり、死んだ人も少なくなかった。現在は血清により死亡者はほとんど出なくなった。ハブは近視であるが空気振動に敏感で、獲物の近づく振動を舌と全身の感覚器官でとらえるという。直射日光には弱く、昼間は石垣やソテツの陰に隠れる。獲物が近づくと身体をS字形にかまえ、体長の2倍ほども飛び跳ねて上顎の二本のキバを打ち込む。咬まれた感じは鶏につつかれた程度で、それと気づかずに死んだ人もいるという。また、咬まれると、ひどい場合には1時間で死ぬという。奄美でハブがいるのは大島と徳之島で、喜界、沖永良部、与

論島にはいない。この3島は隆起珊瑚礁の島で、長い間海底に沈んでいたの、ハブはいないのだと言われる。

この毒蛇ハブは島民に危害をもたらすやっかいな存在というだけではない。人間はこのハブから様々な恩恵も受けてきた。例えば、大島紬のデザインである。独特の絵柄はハブの表皮の模様を思い起こさせる。奄美大島には人口よりも遙かに多い20万匹のハブが生息すると言われるが、そのハブはどれ一つとして同じ模様のものはいない。それほど多種多様であり、それが大島紬のデザインに影響を及ぼしてきたことは間違いない。ハブとの共生でもたらされたもう一つの恩恵として原生林の保護、あるいは自然保護があげられる。猛毒のハブの存在が人々をして長い間、安易に山中へ分け入ることを遠ざけた。山や森は毒蛇のいる危険で恐ろしいところであり、人間の容易な侵入を妨げた結果、今日まで奄美の貴重な動植物種がころうじて護られてきたともいえる。

奄美大島は平野が少なくその面積の大半を険しい山岳が占めるといふその独特の地形もまた、これらの動物の保護に大きく影響し

てきたといえる。毒蛇ハブの存在とそのほとんどが山岳地帯という地形的特徴、そしてケンムンと呼ばれる森の妖怪や草木虫魚などの自然に対する長く培われてきた深

い民俗信仰。こうしたいくつかの条件が重なって、長い間、奄美の自然が護られ、動植物種の宝庫とされてきたのだろう。

道の島

「アマミ」という地名は、古く『古事記』(712年)や『日本書紀』(720年)に「阿麻弥」または「海見」と書かれている。奄美の歴史は、原始から8、9世紀までの部落共同体の時代に始まり、つづいて首長たちが支配割拠していた時代、これに続く琉球王朝時代、奄美の島々が薩摩藩支配下に入った藩政時代の近世、そして明治、大正、昭和(戦前)の時代と、戦後の短いGHQ統治時代および日本復帰以降に大きく分けられる。

那覇世と大和世

奄美はその歴史において、340年の琉球支配時代「那覇世」と

江戸時代以降、薩摩藩支配下の奄美は「道之島」と公称された。奄美の島々は、7世紀から8世紀前半まで、遣唐使船の南島通路として、また中国、琉球から日本への渡航の「道の島」として、さらにその船舶の避難場所、薪炭や食料の供給地として海上交通の重要な地点であった。

平安時代にはいると、唐との通交も消極的なり、南島に関する朝廷の関心も薄らいで、824年に、南島一帯は太宰府の管轄外となり、名目上は大隅国に編入されたが、事実は無所属時代に入った。

260年にわたる薩摩支配の時代「大和世」の、2度にわたって長い植民地時代を経験してきた。奄美が琉球に入貢したのは伝説的には1266年以来のこととされるが、実際に奄美に琉球王国の支配が

及んだのは15世紀以降のことである。14世紀の中頃、沖縄本島に、北山、中山、南山という三つの小国家が成立し、1429年に、中山が南山と北山を滅ぼして琉球を統一した。これ以後、奄美には琉球文化が盛んに流入し、世之主よのぬしのような琉球王族の血縁者や地元の豪族が島主（大親）に任命されるとともに、また各島には、首里きこえのおおきみの聞得大君からノロが神官として任命・派遣されてきた。そして琉球民謡や舞踊、蛇皮線、琉球焼など各種の琉球文化が奄美の文化に深い影響を与えた。当時、琉球王国は、明が1368年の「海禁政策」によって中国商船の海外通商を禁止したので、東アジアの貿易に大きく空いた穴をふさぐ形で、日本と大陸をつなぐ大きな貿易勢力として発展していた。

奄美は、1609年の薩摩藩の琉球侵攻により武力制圧されると、今度は琉球王国から切り離されて薩摩の直轄地に組み入れられることになった。この時から、琉球弧の呼び方も、薩摩に近い方から口之島、道之島（奄美群島）、琉球、先島と序列化されたものになっていった。薩摩時代の奄美統治は1613年に初めて代官が来てから代官政治

が始まった。薩摩藩は砂糖専売制を行って大阪で砂糖を直営販売して、島民を重税の苦しみに追いやった。薩摩藩は1753年～1755年に、幕府の命を受けて木曾川改修の難工事を行い、大変な借金をした上に、藩主島津重豪の派手な生活によって、財政再建どころかもっと大きな借財を作った。その苦しい藩の財政の建て直しに、新しい植民地である奄美の砂糖が唯一の財源としてその対象にされたのだった。島民は水田をつぶしてサトウキビ畑に転換することを強制され、芋などを主食とする生活を強いられた。奄美はまさに、黒糖生産のための薩摩藩植民地となったのだ。黒糖による納税ができない農民は債務奴隷とも言うべき「家人」やんちゆうに転落し、その数は人口の三分の一にまで及んだと言われる。1871年（明治4年）に家人解放令が出されるが、最終的に解放が完成したのは明治末といわれている。薩摩藩は天文学的ともいわれた藩の負債を、このような奄美農民の過酷な収奪によって精算し、明治維新时期に雄藩として活動する財政基盤を確保したのであった。奄美の黒糖収奪がなければ明治維新は違った形になっていたであろうとも

言われる。

このように、琉球王朝と薩摩の狭間で支配・収奪・差別の辛酸をなめた奄美の歴史は、しかし他方で、万葉時代の古語を残していると言われる独特の島言葉、巫女の古い形を残すノロやユタ、数十年前まで見られたさかんな祖先崇拜や洗骨の風習、頭上運搬や額に

ひもをかける背負い籠、高倉や独特の茅葺き屋根、盛大な年中行事や豊かな民俗芸能など、すでに本土では減ってしまった古代文化の残影を長年にわたって育み続けてきた。奄美が民俗学や文化人類学の宝庫といわれてきたゆえんである。

「奄振」と呼ばれる妖怪

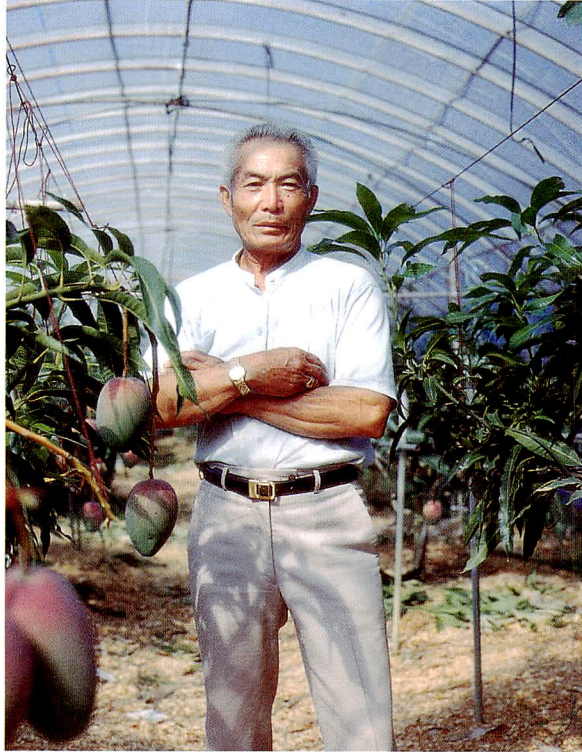
奄美が経験した3度目の植民地支配は、終戦直後の8年間にわたる短いGHQ占領時代「アメリカ世」であった。1946年1月29日、連合軍最高司令部の覚書により奄美群島は沖縄とともに行政分離された。1951年に「奄美大島日本復帰協議会」が結成され、その後の全島あげての復帰運動によって1953年12月25日に日本に復帰した。復帰当時の奄美経済は極度に疲弊し荒廃していたため、政府は復興を重視し、1954年、「奄美群島復興特別措置法」を制定して復興事業を実施

に移した。しかし、郡民と本土との所得格差は一向に縮まらず、それは全国平均の半分にも満たない状況であった。そこで第二期目、三期目と続けて「奄美群島復興特別措置法」と「奄美群島復興開発特別措置法」がそれぞれ制定された。そして、1994年には改正奄振法が成立し、さらに2003年まで10年間の延長が決定された。

このように、1954年6月に奄美群島特別措置法が制定されて以来、「復興」「振興」「振興開発」と改名しながら5年おきに法改正・延長を繰り返してきたが、その基本的考え方は一貫して日本本土や沖縄との「格差是正」と奄美の「経済自立」にあった。そのために、奄美の日本復帰から現在までの45年間、実に1兆4,400億円近い

事業費が注ぎ込まれた。このうち道路、港湾など大規模な自然改変を伴う事業が予算全体の8割近くを占めるといわれる。また、この40年間に、産業の主要な担い手である青壮年層を中心に奄美群島総人口の三分の一が人口流出した。その結果、高齢化が猛烈な勢いで進行し、65歳以上人口は97.4%も増えた。また、1995年の65歳以上

の人口比率は22.9%で、全国平均の14.5%、鹿児島県平均の19.7%よりもはるかに高い。これまでのような、「奄振」にすぎた「格差是正」や「本土並」を追い続けることによって失われるのは、実は奄美の姿そのものであり、地域の自立意識にほかならない、との指摘も多く聞かれるようになった。日本復帰からの半世紀は、奄美の



マンゴー栽培農家 ©青山 良氏提供

人々にとって、まさに「奄振」と呼ばれる妖怪に翻弄され続けた時代であった。今、奄美では、新たな目で足下の豊かな自然と文化に静かに向き合い、奄美の真の豊かさを自らの力で「再発見」する人たちが増えつつあり、またそれを様々な形で情報発信する試みが多くみられるようになってきた。